

平成 18 年度第 2 回 次世代育成協議会第二部会（子育て支援）概要

平成 19 年 1 月 16 日(火)午後 2 時～  
区役所 6 階第四委員会室

出席者 増田まゆみ、小林普子、福西七重、金澤邦子、三島知彦、内藤美那子、加藤葉、戸塚陽子、工藤有子、牛込警察署長代理 生活安全課長 渡辺 徹、東京都児童相談センター所長 丸山浩一

1 開 会

福祉部長あいさつ

前回は非常に活発なご意見をいただいた。部会長にも取りまとめていろいろご尽力をいただいた。本日のご意見を承ったご意見を事務局の方で引き取らせていただき、次回次世代育成協議会に報告できるように持っていきたい。

2 資料確認

子ども家庭課長

3 議 題

- (1) 「子育て支援」各実践を点から面にしていくために  
方策案に基づき協議  
ア 委員からの報告  
イ 具体的な提案を協議  
ウ まとめ

4 議 事

部会長

子どもをめぐる状況は悲惨な状況が続いている。そういう意味でも、この部会で地域と一体感を持っていく具体的な提案をしていくことがとても大事であろうという認識を強くしている。今日は、3人の方々からご意見を寄せていただいている、ご説明等をお願いしたい。

委員

外国人・外国に関係のある人たちへの子育て支援について。

外国人・外国籍の親に対する子育て情報について、区ではホームページ等によって情報が得られるよう取り組んでいるとのことだが、皆さんパソコンを持っているわけでもないし、パソコンが使えるという人が余りいないという中で、外国語版のホームページを開設しているということだが、現実的にはそれが使える状況にないことを、むしろ理解していただきたい。

ガイドブックについても、なるべく手渡しで渡せるようにはしているが、結局手渡しできる人には、数には限りがあり、本当に 10 人ぐらいにしか渡せないのが現状だ。

大久保小学校を使って、月 2 回の親子の教室を実施しているが、月 2 回だと回数も少ないし、曜日も限定される。土曜日の午前中となると、働いている方もおりいろいろな条件のもとでは参加できる方も本当にごくわずかだ。常設することによって、もっと幅広く様々な人が来ることができるようになり、そこに子育てに関する情報を集中的に置くことができ、情報のほしい人はそこへ行けば情報が得られることになる。常設の場としてはプラザの方にもあるが、11 階という高さもあり、歌舞伎町の真ん中

ということもあって、子育ての人にはなかなか行きづらい。

それで、今回、区の協働事業案ということで「NPOみんなのおうち」の方から事業について使わせていただき、児童館を使っただけの子どもたちの学習支援ということができるようになったことは大変喜ばしい。

団体同士の連携について

民間のボランティア団体の活動が点から面になっていくということは必要だと思う。その辺は割とうまくいっていると思っている。

現に、私が属しているほかの団体と「みんなのおうち」で新しい提案ができたということで、現実的にはできていると考える。むしろ活動をしていて感じることは、役所の内部の横の連絡がとれてないなということをかなり実感している。子どもに関して再三言われているように、子ども部とか子どもに関する問題が一元化できるように役所の連携をとっていただきたい。

部会長

次に、「子育てを支援する連携のとれるコーディネーターの存在」を提案いただいた委員に説明をお願いします。

委員

今、保育園では地域のお子さんの子育て支援ということを担当している。保育に行き詰まったお母さんにとっても喜ばれることも多いが、ただ預かってあげて、そのお母さんから話しを聞き、子育てにほっとする時間が持てたというだけで終わっているのではないか。

夜昼、逆転しているお子さんについて、一時的にお母さんから離して預かるだけになってしまっている。

やはり、いろんな事情をよく知っている第三者的な子育てを支援する連携の取れるコーディネーターの存在があれば、専門性が出て円滑に行くのではないかなと思う。

部会長

質問等があったら、後ほど一括してやらせていただきたい。

委員

児童館をもっと活動の拠点にしたい。児童館に、田舎の公民館のような地域の拠点機能を持たせたいと考える。ことぶき・保育併設で子育てを通して見ていくことができる。「みんなのおうち」は新潟に拠点を持っているが、毎月行かれるものではない。地域の中で、児童館・ことぶき館を使いながら集まることのできる場ができれば、もっともっと継続した子育て支援になっていくと思う。

また、放課後の居場所づくりについて住み分けはぜひ考えていただきたい。地方では、ほとんど児童館がないため居場所を小学校につくるということは非常にいいことだと思う。しかし、児童館があるところでは子どもたちの居場所はそれなりにある。そうした現在あるところをきちんと使うとよい。

この4年ほど児童館を使ってクリスマス会を実施している。保育園の保護者、小学校のPTA、私たち学童クラブ出身の現役OBとか、そんな人たちが中心になって、児童館の自主サークルというのがある。子どもたちだけで100人ぐらい集まる。どこから子どもたちは集まってきたのだろうと思うぐらいだ。やっぱり広い居場所があるというのは大きい。

児童館の管理員としてシルバーがいるが、もっと土日も配置して遊べる場にしてほしい。自主サークルなどに貸し出しをし、地域に呼びかけて、ご飯をつくってみんな交流して泊まるという、そんなことをやれる場ができる拠点があればと思う。

それと同時に、ごみを残さず掃除をきちんとすることなど、利用規定を厳格に定めた上で、団体登録の条件に食事のみでなく、飲酒も解禁する。これをぜひやってほしい。

ゆったり～のは、自主運営だが、子どもたちは別室で遊ばせ、お母さんたちの話を聞いてあげることもしている。このように家族を含めた交流に今、進んできつつあり、お父さんも含めた居場所を、ゆったり～ので、行ってきて非常に好評である。そういうものが広がっていけば、もっといい居場所があちこちにつながると考える。

部会長

それでは、3人の委員の方のご発言に対して、何かご質問、意見をどうぞ。

委員

コーディネーターとは、親子に必要な様々な援助をつなげていって、一緒にその人の話も聞きながら関係先につなげてあげる。そんなイメージか。

委員

いろんな実情をわかって、この親子に対してはこんな支援の仕方をした方がいい、保育園の方もこの部分をお手伝いいただきたいというようなことを調整してくれる方がいいれば、いろんな意味でうまくいくのではないか。

委員

例えば学童クラブの子どもの場合は、私たちも多少は子どもを通してわかる。昼間の学校の様子がわからない。そういうつなげる役割の人たちはもっとほしい。

委員

コーディネーターがいたらすごくいいだろうと思う。本当に間際の人たちが救われる。

委員

予算を区は取って、コーディネーターを養成していかないとこの問題は解決できない。小学校には全部コーディネーターが入っている。

保育園とか幼稚園もちゃんと入れていけば、いろんなことで成果をあげられるようになる。

部会長

今のことに関連して何か意見がある方は。

委員

実態として、スクールコーディネーターというのはいるが、その方たちが支援とか、もっと踏み込んでお母さんたちの苦勞の聞き役に回れるかというとなかなか難しい。子ども部みたいなものを作って、異動しないでその専門職として残ってノウハウをきちんとやっていく人材を育成しないと、そこはちょっと無理かなという気がする。

事務局

さまざまな社会的資源を利用して、支援が必要な子どもの家庭を支援する必要性は

認識している。子ども家庭支援センター、榎町児童センターは、指導業務を民間の業者に委託しているが、ソーシャルワーカー職員を配置している。

児童館として課題があった場合は、子ども家庭支援センター、学校等と連携をしながら支援していくという中でやっている。

部会長

区で配置をし、努力をしていることと、先に委員が話した保育所の一時保育等のつながりに機能をしているというようなことはあるのか。

事務局

現状の一時保育は保育課の職員。虐待・DV等、非常に課題があるお子さんや家庭ということであれば、子ども家庭支援センターと連携している。

部会長

このコーディネートをするというのは、どこの領域でも課題になっているし、とても重要ではあるが、実際に機能をするにはかなりいろいろな厳しさもあるかと思うが。

児童相談センター

現在は虐待で手一杯の状況である。新宿区は支援センターも早く立ち上げてもらっている。新宿の場合は力が付いてきていると実感している。他区に比べてかなりよい印象がある。スキルをブラシアップするのは大変であるが、医者であっても看護師であっても大変でそこが問われている。システム構築が追いついていない。

委員

保育園だけで何とかしようと思わないほうがいい。保育園は本来の役目があるから、いろいろなところと連携して一時保育もやればよいと思う。

委員

親子関係がうまくいってないとか、課題がある人でも、日常的なつながりをしていかなないと、信用して話しをしてくれるという環境は育たない。昼夜問わず、この人たちを応援していこうというような気持ちと具体的な実践が必要だ。

子ども中心にみんなで手をつなぎ合って、そこにどれだけ踏み込むかということを一生涯やってみないとできないと思う。新宿区は新宿区でかなりのものができ上がってきているという気はするが、中心になってそれを行うかとなると、だれも決めてない感じがする。

委員

今、一時保育に子どもを預け、預かるということが本当に子育て支援につながるのかという悩みをお聞かせいただいたが、区立保育園の場合の一時保育は、定員に空きがないとやっていない。今新宿区内の保育園は専用室を設置するような施設がない。19年4月からは、1時間延長の12時間対象の保育園が増える。そうすると、もう目いっぱい保育園の施設を現行の職員の中で対応していかなければならないということでは、保育園に来ていないお母さんたちのところまでなかなか目も手も向かないというのが実態だ。

委員

コーディネーターという立場の人を育成してほしい。

ボランティア活動で子育て支援をしていると、経済的にも、精神的にもすごく負担が多い。新宿区はほかの区に比べていいとの意見があったが、児童センターも、すごく利用させていただいており、職員の方もすごく一生懸命やっているのもよくわかり大変さもすごくわかっている。

ただ、そこだけに押しつけていいものではない。人を育てるということを、要するに福祉課だけの問題ではなく、区全体、教育委員会も含めて区全体でもう少し真剣に考えていただきたいなという思いがある。

部会長

かなり学童との関連もありそうなので、ひろば事業について事務局から説明をしていただきたい。

事務局

放課後ひろばの実施について説明【資料】

部会長

この事業が文科省、厚労省ともにといい、大きな今までとは違う流れの中の一環としてとらえられる。この部会で終始出ていたのは、「教育と福祉の2つの世界がなかなかいい形でお互いが結びついていかない」というのが、毎回出てきた課題だったと思う。

そして、例えば保育所と児童館の関係であるとか、今ここで児童館に代わって選択肢がふえ、しかも従来のものとは違う形が取られようとしている。

こういった新たな取り組みが始まるということも視野に入れながら、今まで、そして本日いろいろとご意見等を出していただいた中で、少し整理ができればいいのかというふうに思う。

区で、地域で、そして当事者が工夫すること、これらは恐らく一つ一つが分離してできることではなくて、もちろん関連性を持っていたというふうには思うが、これからの具体的な提案に向けて、ぜひご意見をいただきたい。

児童館を活用して、大久保地域で外国人の親子のための居場所という提案も出ているが、具体的にどういう形になれば成り立つのか。

委員

大久保児童館でもなかなか外国籍の人たちが集まらないと言われている。情報提供ということで幾つか行っているけれども、翻訳してもなかなかそういう方というのは伝わっていかない、具体的に来てもらうにはどうしたらいいのかなというのが課題だと思っている。

外国籍の方への支援は、今年で3年目になるが、日本語教室を置く大久保小学校でやってきた。日本語が習得できるという、一つ何かメリットがあるということで、ほかの区からも希望者もいる。

児童館の場合、午前中は幼児サークル的なものに使うが、放課後は、一般の子どもたちに開放したり、学童の子たちということになっていく、親たちの居場所となるのが可能なかどうか相談していきたい。

委員

外国籍のある家庭の支援という場合に、問題はいろいろあると思う。子どもがまだ乳幼児で地域から隔絶して生活をされているケースと、それからもう既に幼稚園な

いしは義務教育である小学校に通い、子どもは地域生活をしているけれども、保護者の方は地域生活とは隔絶して生活をしている子どもの立場というのと、課題としては難しいものがあるなど思っている。

児童館の活用という部分でいうと、夜間の子どもたちの居場所というか、ネグレクト状態にあるお子さんが、かなり新宿区は多くいるのではないかなと思われる。これは外国籍に限らず、日本の国籍の子どもでもかなり多いのではないかなと、数字は持っていないが。その子どもが徘徊などすると、そこで初めて民生児童委員さんなどに発見していただいたりとか、補導されて警察のご厄介になったりとかということで顕在化するが、家でじっとしている分には誰からも分かられずにいる子どもが意外と多いのではないかと感じている。

一応親がいるのだからいいのではという考えもあるとは思いますが、その部分が一般的な支援のいろいろな施策から漏れている子どもたちというような気がする。

夜、ことぶき館のような食事もつくり、休める施設があって、なおかつ児童館のように遊べる場所のある場所を、そういう子どもたちのために、親がいてもいなくても提供できないものかなと考えた。

その場合に、恐らく外国籍の子どもの方が非常に数的に多いのかもしれないが、結構そうでない家庭で、しかも高学歴の親御さんであったとしても、そういう子どもがいて、そしてその実態をどこも把握していないということもまた一つ問題ではないかなというふうに思う。

親の保護が不十分な子どもたちに対する施策を、保護者の責任にしないで地域で見えていくということ、今後検討していく必要があるのではないかなということを一っ感じている。

それから、コーディネーターの存在に関しては、やはり非常に重要で、ある程度子どもの育ちを見守っている期間、その職務につけるというシステムが必要なのではないか。

この子どもが乳幼児期にどうだったかということ、そのころの親子関係がどうだったかということを知っている人がまた小学校とか中学校になったときに、その保護者から相談を受けて、答えて返す内容が、そのときしか知らない人に比べて違うのではないかなという気がする。

一時保育について、私どもの施設では、専用室とは違う運用の仕方をしており、時間で切って、時間単位の一時的保育を行っている。1日8時間以内で利用料が幾らという形ではなくて、1時間幾らで、30分単位でお引き受けするという、そういう一時保育で最長4時間までというふうにさせていただいている。

ただ、どうしても保護者の事情で、4時間で行って帰ってくるできないときなど、理由は問わないで行う一時保育だが、そのときだけは、事情を聞かせていただいて、受け入れられる範疇であれば引き受けている。実感としては、やはり時間を切っているということもあると思うが、必要があるので託児で使っていただき、そして必要性が終わるとすぐに戻ってくるという感じだ。このやり方は事務効率上は悪く、集中する時間帯とか全くない時間帯などがあり、運営や経営はやりくりが非常に大変、事務も煩雑であるが、短時間の保育ということでやり切れているのかと思っている。

#### 放課後子どもひろばについて

親の就労で子どもの遊ぶコースが決まってしまうのでは。当面は学童クラブの利用が多い地域とかで実施されるということで非常に喜ばしいが、今後、また保育園の子、幼稚園の子のような感じにならないようにしていただきたい。

事務局

遊び場としては児童館を活用するというのが新宿スタイルだが、今度の子どもひろばについても、学童クラブ実施校というところで考えてみれば、特別教室を改修して学童クラブとして今運営をしており、子どもたちはそこでも遊ぶことができるし、放課後子どもひろばの方に登録して、そちらの方に。敷地は一体で遊ぶことができ、完全に区別をして子どもたちがいるということではない。

#### 委員

実際校庭開放で子どもはどのくらい遊んでいるのか、調べたのか、帰りの安全面のことも考えたのか、そういうのも全部把握して、スタートするのだと思うが。

#### 事務局

それぞれ学校や地域に応じた運営の仕方を考えている。

#### 委員

学校で子どもたちが放課後、学校が終わってから遊んでいる現状が余りないが。

#### 事務局

遊びの支援者を配置して、遊び場として積極的に活用をしていこうという形を考えている。学童クラブについては、4年生以降の対応について要望がでていいる。また、学童クラブの利用について、他区では放課後学校施設で遊べるような形にすることによって、学童クラブをなくし、一緒にそこでやっていくというやり方もあるが、それは学童クラブが本来持っている保護機能、遊びと生活の場の保障ということがきちんとできないのではないかというような意見もある。新宿区では放課後子どもひろばで遊びと学習の支援、それから学童クラブについては別途運営していく形で現在やっているところである。

これからどう変わっていくのかというのは、それぞれの地域によっているんな地域性や施設配置によって違ってくる。今後それぞれの準備課の中で詰めていくものとする。

#### 委員

学童クラブとの住み分けについて、新宿区については、そのようになると思うが、23区としては大体学童クラブをなくしてしまうということが本当に行われている。

#### 委員

区民会議でも学校を開放して子どもの遊び場として使えたら良いという意見は、住民からも出ている。それが一つ一つ実現していくのは、とても良いことだなと思っている。新宿区では、例えば冒険遊び場であるとか、児童館の先生たちがかなりいい取り組みをされている、それなりのノウハウが何かあるのではないかと。区としての社会的な資源を生かしていただきたい。

保護者や、大人サイドが見守っていけるようなことを探っていっていただきたい。

#### 委員

一歩前に進んだということで評価していきたい。日中一時支援がスタートする。今後とも応援をお願いします。

#### 委員

新しいことを試みようとしている姿勢が良い。

アンデスにある短い「ハチドリ一滴」という小説がある。山火事が起きて、火中

のトラや動物は逃げていく。ハチドリだけ向かっていく。なぜか一滴だけ口に含み消しに行った。大きなことをやるのは難しいが小さなことができない人は大きいこともできない。今の話しをいろいろと伺って思い出した。企業の中でも、仕事と家事を両立させたいという男性も多くなってきている。育休も女性6ヶ月、男性3ヶ月と分けて活用している人も増えている。男性も関心を持ってきている。企業の力も具体的に outsourcing していくことが大切だ。

部会長

働き方の見直し、他にこんなことならやれるというような動きはないか。

委員

心の教育ができればと思っている。計画中だが、子どもにも読んでもらえる本を作っていきたい。

部会長

自分の子育ての時から明らかに時代が変わっている。

委員

17年間保育園に通っていた。お母さんが迎えに来られないのは不憫と声をかけられたが、今は、荷物を持って保育園にくるお父さんたちも多くなっている。保護者会にも年1回でも来るようにできればいいが。

警察

署長の代行として出席している。皆さん活発に議論をされている。いろいろな話しを聞かせていただき、非常に勉強になった。

警察として皆さんと協力して何ができるかというのをずっと考えている。

子育て支援という土壌において、警察ができることがあれば、何か警察に相談がしたい場合、気軽にご連絡いただきたい。

この子育て支援だけではなくても、何か警察関係の相談事や関係があれば、協力したい。

委員

一時保育について、8時間お子さんを預かるというのは、保育者も緊張が大変だし、子どももお母さんと離れて限界も超えてしまうと思う。8時間必要な場合もあると思うが、制度としての融通性、現場での困難というのが一つある。一時保育の事業は、始まったばかりで、これから検証をしていかなければいけない。

このように不特定多数の人を相手に子育て支援をする場合、専門的なスキルを持った人の配置をしていただきたい。子育て支援センターでは2名配置している。

委員

確かに大変だが子どもが変わっていくという喜びもある。職員の配置もしている。

ドイツとかイタリアとか行く機会をもったが、以前は、ヨーロッパは進んでいるとしか思っていなかった。今は、保育園、乳幼児保育（ゼロ歳児・1歳児の保育）に関しては日本が一番だと思っている。このスキルがあるというのは幼稚園でもない、やっぱり保育園だ。保育士にゼロ歳児・1歳児の保育をこんなにできる人たちがいる。特に子育てに行き詰まった人は、大体乳児を持つ親であり一時保育を利用しているのはほとんどゼロ歳児・1歳児である。

ゼロ歳からも教育なのではないかなと思っている、勉強することの教育でなく、本



当にそういう時代が来ている。行政がもっと活用してほしいと考える。

委員

評価していくこと、行政が再評価していく必要がある。

委員

施設の活用として、児童館という性格から、やはり子どもに還元できるように有効活用をお願いしたい。子どもを対象に「ごはんを自分でつくろうよ」という催し大変好評だった。

委員

保育園と地域の接点は広がりつつある。長年のノウハウを聞かれたら宣伝してほしい。

部会長

- ・福祉・教育、施設や人のつなぎあいについて、できることを周囲の人に伝えていく。
- ・地域で支える、児童館・保育園・幼稚園・乳児所それぞれの力を次世代につなげていくことが大切。
- ・専門性のあるコーディネーターの存在が、相手の求めに的確に応えていくために求められている。

以上、本日は話し合ったことを、お互いに工夫しあい子育てにつなげていただきたい。

事務局

本日の話し合いを含め、3月26日開催の次世代育成協議会で2年間の議論をまとめていく。